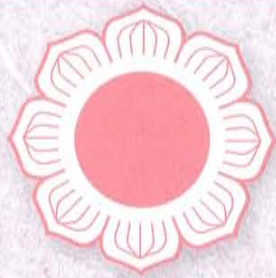


HOKKESHU SHINPOH



法華宗信報

拓く



▲昭和 10 年 日高久遠寺 宗祖 650 遠忌

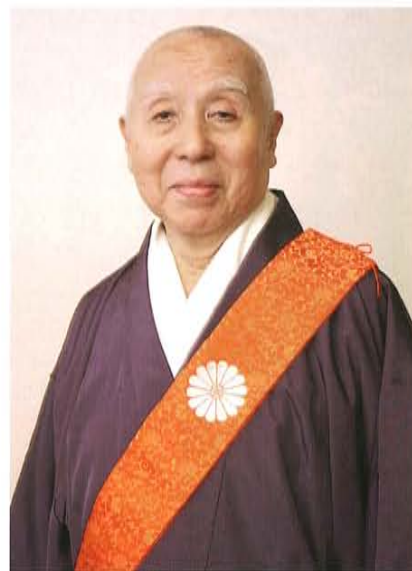
明治 35 年 新ひだか町静内▶



- 2 ご挨拶 法華宗管長 桃井日英猥下
 - 4 北海道教区の紹介
 - 6 寺院の歴史 新ひだか町 久遠寺～後編～
 - 8 コラム／私の住職日記
- 連 載／北海道を知って下さい!!

155

平成30年1月1日
発行 法華宗宗務院



ご挨拶

法華宗管長

桃井日英

私が去年の五月、大本山本能寺に晋山してより、毎朝本堂と方丈のお内仏堂にお参りするのですが、方丈には昔よりお内仏用の過去帳がありまして、毎朝、日付のとおりにお勤めするなかで、二十二日になると、

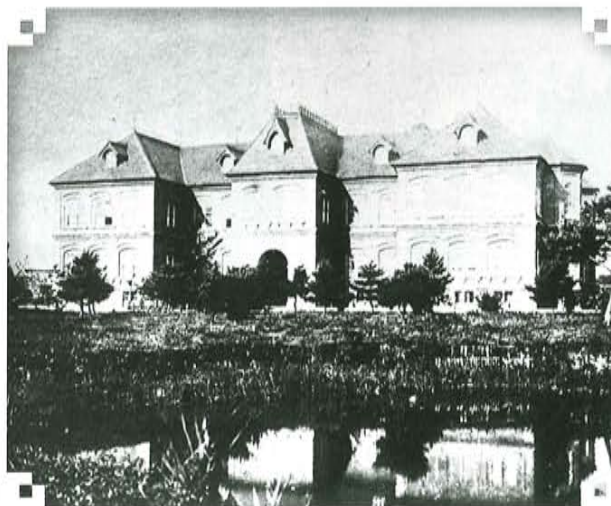
○大正七年五月二十二日

○学習院彰勲法道日輝大居士

○北海道開拓導師 渡辺伊平 七十八歳

と記載された法号がです。そのときは必

ず法号を詠みあげ、回向しています。



塔撤去後の北海道庁(明治30年頃/1897年頃)【北大北方資料室】

立派な大法号なのでよほどの方と思っていきましたが、過去帳には渡辺伊平と法号が書かれているだけで、それ以上は分かりませんでした。今年の七月、十月の法華宗信報が北海道教区から送られてきて、その記事の中で「法華宗北海道開教への道のり」という記事を読んではじめて渡辺伊平という方は法華宗を最初に北海道に布教した方であることが分かり、全くもって、いい齢をして不明を恥じるばかりであります。



▲雪原（美瑛町）

記事によると、渡辺伊平氏は讃岐の人で金岳公子の門人で、主に九州、淡路を中心に八品の教えを広められ、その後、宗教開拓団を結成し、その団長となつて、明治十八年淡路洲本港から三十三戸の団員をつれて蝦夷（北海道）地に渡つたのであります。この団員は金岳公子の教化を受けていた法華宗の信者たちでありました。そして開拓団は北海道日高下方向村（今の静内）の浜に上陸されました。以後日高を中心に金岳



明治14年当時の札幌全景（明治14年／1881年）【北大北方資料室】

この渡辺伊平氏は金岳公子の八品講の門人で北海道にはじめて八品のお題目を広められた伝説の行者であつた事も分かり、氏には甚深なる敬意を表し、お命日には改めて哀悼の念をもって回向に勤める存念であります。



機関車弁慶号に雪払車を付け除雪走行（明治15年／1882年）【北大北方資料室】

公子のご本尊をにかけて開拓布教を展開し、艱難辛苦の末、後の久遠寺の礎となる建物を建立し、北海道にはじめて法華宗の旗が翻つたのであります。

法華宗 北海道教区を 紹介します。

信報の編集を担当している北海道教区をご紹介します。北海道地方を教区とする北海道教区には約 40 の寺院教会があります。

歴史

法華宗の中では新しく、明治以降130年程度の歴史となります。明治の開拓時代に始まり、炭鉱の開発と発展と人口の増加に合わせて寺院教会が増え、戦後の発展期に更に寺院が増え、現在に至ります。



オーホ島の
ウール街と呼ば
れていた小樽。

広大な面積

北海道は国土の二割を超える広さです。この広さは、九州（8県）と中国地方（5県）、四国地方の愛媛県、香川県、高知県（3県）を合わ

せたかなりの面積となります。北海道での移動

は数百キロの移動、数時間の移動もよくあることです。例えば、高速道路を利用して、札幌から函館は車で約4時間、札幌から釧路は車で約4時間かかり、東京から名古屋と同じくらいの距離になります。

道中は見晴らし良く、直線数キロ道路が普通であり、エゾシカやキタキツネなども運転中に見ることが出来ます。寺院教会は主要都市をはじめ、北海道の玄関口である道南の函館から道東の世界遺産知床近辺まであります。



運転中、
道路に出て
くるキタキ
ツネ。

四季豊かな気候

北海道の気候は夏は涼しく、冬は寒さが厳し

く、四季がはっきりしています。

冬は零下の気温が普通です。お寺の本堂も暖房で暖めなければ、当然零下の気温です。花瓶の水は一日で凍ります。普段生花は供えられず、お茶湯も朝から夕方まで、お供えしたら凍ってしまいます。しかし、お寺で法要があれば、暖房で真夏より暑くなるくらい暖かくなります。また、冬の間は雪かきとの戦いもあります。

春は5月になって、一気に草木が芽吹き、花が咲き始めます。梅と桜が同時に咲き、寂しかった山並みが一斉に華やかな風景に変化します。

夏は涼しく湿度が低いため、とても快適な気候です。道外から自転車やバイクでツーリングに押し寄せます。秋は短く10月頃紅葉が始まると一気に冬に向かい、10月下旬には初雪となります。



上富良野の直線道路。2.5kmのアップダウン。

お寺での法要

北海道では、他のお寺さんを法要にお呼びする場合、泊まりがけで来て頂きます。お寺とお寺の距離が離れているため、昔の交通事情では泊まりがけでしか行き来することができなかったからです。10月から11月にかけて行われる日蓮聖人を偲ぶ御会式法要ではお寺さんは前日から泊まり、御逮夜からお勤めいたします。



弟子屈の900草原。北海道の雄大な大地を感じられる場所。

北海道教区での活動

北海道教区では、毎年御盆の後に教学講習会が開催されております。以前はお寺を会場とし

ていましたが、近年札幌のホテルにて開催されております。

青年会の活動に冬季錬成があります。毎年2月の最も寒い時期にお寺に泊まり、講師をお招きし講義を受け、厳寒の中、托鉢唱題行を致します。昨年は北見市常呂町で、流水が打ち寄せるオホーツク海の近くで、太鼓を打ち、お題目を唱え数時間の托鉢を行いました。

北海道教区の概要をご説明させて頂きました。



オホーツクの流氷。海が一面氷の平原になる。

法華宗 北海道開教の寺

「久遠寺」

後編

前編のあらすじ

北海道の太平洋沿岸日高地方にある法華宗開教の寺院「久遠寺」は、法華宗信者が宗教団体で移住し、苦難を乗り越え開拓を成し遂げ、建立された寺院である。明治十八年兵庫県淡路島より、北海道日高地方静内（現在の新しいだか町）に法華宗信者三十三戸で入植し、何とか開墾に取りかかることができた。

苦難を信心で乗り越えた開拓



原生林を開拓し、現在の豊畑

静内に入植した翌年（明治十九年）から、各戸別々に分かれて開墾をすることとなった。しかし、農具の不足、移住以前からの使い古した道具であったため開墾は中々はかどらなかった。四月



三光堂の絵

中に大霜となり、大豆・小豆等は枯れ、直ぐさま裸麦・粟・蕎麦等を蒔き付けしたが、秋霜が早く不作となった。この年（明治十九年）は淡路から持参した食料は無く、給与金、官米もな

食料不足に悩み、衣類を売って芋を買い、野草を食べて開墾に励んだ。厳しい食料事情と困難に遭いながらも開墾に熱心なありさまに役所も心配し、官米百俵を特別に安価にして三年間無利子で貸与するから、それで飢えをしのぎ各々開拓に勉めるべしとの達示があった。しかし、渡辺伊平団長は、「飢饉が続けば政府に返納することができず、政府のやっかいを蒙るだけかと悪名を世間に流布することとなる、元より一同は不自由難儀することは覚悟の上である」と、官米の拝借は恐縮ながらお断りすると即答した。

当時の新聞の記事に、艱難辛苦の中、講中一同一家の如く、甲は乙を助け乙は甲に従い一村一家の如くお互いに親睦し開墾に努力奮闘している開拓団として取り上げられる様になった。光陰矢の如し明治二十年を迎えた。淡路より七家族が開拓移住に加わる。この年も凶作不作となり、戸数も増えていたため大いに難儀する。明治二十一年も凶作不作となる。困難が

続く中でも、この年から冬期間に団長長の住宅に小学校を開設し教育にも力をいれた。

三光堂（現久遠寺）の創設

明治二十二年と明治二十三年は、とても順調な天候に恵まれ、えん麦・裸麦・小麦に至るまで豊作に恵まれた。収穫の多くを近くにある宮内省御料牧場で買い上げられた。それでもまだ余剰があり、それも売却することができ、初めて村中一同経済的に楽になる収穫となった。講中で収穫された雑穀は、他の地域よりも価格が高く、その名は函館まで届いていた。その理由は、雑穀の検査を厳密にして、品質を厳選し、乾燥が悪いものは良い状態になるまで手を掛けるように講中で指導されていたからである。

収穫に恵まれたこの年、講中一同協議して三光堂（現在の久遠寺）を建設することを決め、木材の購入をすすめた。この年、道庁より渡辺伊平は自費移住の団長として一村をまとめ、一戸も離脱することなく、開拓に従事したことは北海道移住者の手本であると表彰を受ける。



久遠寺本堂

明治二十四年になると農具・機材・馬具類、



久遠寺堂内

明治三十三年
岩内町日蓮宗蓮
華寺住職渡辺日
慧が渡辺伊平団
体長と三光堂に
て法論を行う。
結果、渡辺日慧
は日蓮宗から法
華宗に転派し、
俱知安に布教所
を開設する（後
の本因寺）。以
後本因寺の弟子

馬等が村中に多
く取り入れら
れ、開墾が大い
にはかどり、開
拓以来の大豊作
となった。そし
て、三光堂の建
設も本格的に開
始する。講中一
同厳寒雪中いと
まなく協力し、
年も暮れ、明治
二十五年二月に
上棟し、八月金
岳公子の御正當に落成する。
その後、開拓は軌道に乗り講中よく協力し、
あらゆる困難を排除し、益々成果を挙げ、諸般
の事業の経営にも信仰を根本の基礎として、計
画され実行に移された。



久遠寺の境内

の多くが北海道に寺院を建立し法華宗の教線が
拡がっていく。

当時講中の宗教上集會は資料によると

(一) 年集會

二月二十四日、二十五日 日隆聖人御正當會

六月十五日 三光天子例祭

七月十五日 孟蘭盆會

八月五日、六日 金岳公子御正當會

十月十二日、十三日 日蓮大聖人御會式

(二) 寺での月集會

毎月八日 鬼子母神講（家庭婦人）

毎月十二日 日蓮大聖人御速夜（老若男女全
て）

毎月十三日 日蓮大聖人御正當（男女老年人）

毎月十三日晚 青年御講（青年が日中の仕事
を済ませた後）

毎月二十五日 日隆聖人御正當（男女老年人）

一月から三月までの日曜日に小学生が集まり

年齢に応じ八品要品の読経練習を行う。

(三) 自宅での集會 八組に分かれ各家順番に
廻る

毎月五日 金岳公子御速夜

毎月二十四日 日隆聖人御速夜

以上のように、信仰が生活の中心にあったこ
とがわかる。

現在の久遠寺

大正二年には三光堂を経王山久遠寺として寺
号公称が認められ、高松市本堯寺第二十三世吉
岡日芳徒弟丸山林昌が第一世住職として入山す



久遠寺本堂の窓から見える風景

る。その後のル
ベシベ村は田畑
や水田も順調に
増え、治水工事
や道路の整備が
進み、飛躍的に
発展していく。
昭和九年静内町
字名変更により
ルベシベを豊畑
と改称する。現
在は軽種馬（サ
ラブレット競走
馬）生産が盛んな豊かでのどかな田園地帯であ
る。現在も豊畑の本来になる檀信徒宅には金岳
公子の御本尊を安置され、金岳公子の御位牌を
祀る家も多い。

金岳公子の高松八品講の布教により、法華宗
の北海道開教が達成され、厳しい当時の困苦と
欠乏の中でも日々の暮らしは信仰に支えられ一
天四海皆帰妙法の夢を持ち続け異体同心を实践
し一戸の脱落もなく宗教移住を成功させた。豊
畑地区では毎年八月に開拓を始めた場所に建立
された遺跡碑で先人への感謝の法要を厳修す
る。これからも日蓮大聖人、日隆聖人、金岳公
子から続く法燈は永く豊畑の地で相続されてい
くであろう。

※久遠寺第三世末澤日念上人遺稿『移住と開拓』より抜粋
※参考文献 『開村五十年記念 北海道日高豊畑本門仏立講
沿革誌』

北海道を知って下さい!!

北海道あるある!! ~難読地名編~ その2

北海道には難しい読みの地名がたくさんあります。その多くは先住民族アイヌの言葉に由来します。地名を想像してみてください。

①苦鶉

勇払郡占冠村 アイヌ語の「トマム」(湿地)

②美羽鳥

上川郡剣淵町 アイヌ語の「ピバ・カル・ウシ」(カラス貝を取るところ)

③安瀬

石狩市 アイヌ語の「ヤーソシケ」(細かな網で漁をしたところ)

④雄武

紋別郡雄武町 アイヌ語の「オム」(川尻・塞がる)

⑤新冠

新冠郡新冠町 アイヌ語の「ニカブ」(ニレの木の皮)

⑥白人

中川郡幕別町 アイヌ語の「チロ・ト」(鳥が多い沼)

⑦押帯

中川郡本別町 アイヌ語の「オ・シュッ」(川尻・箱)

⑧老若舞

釧路郡釧路町 アイヌ語の「オ・イチャン・オマブ」(川尻に鮭鱒産卵場がある)

⑨初無敵

釧路郡釧路町 アイヌ語の「ト・ウン・テ」(沼のような)

⑩知方学

釧路郡釧路町 アイヌ語の「チブ・オマ・ナイ」(舟のある川)

⑪入境学

釧路郡釧路町 アイヌ語の「ニ・オマ・ナイ」(流木の集まる)

⑫標茶

川上郡標茶町 アイヌ語の「シ・ベツ・チャ」(大きな川のほとり)

⑬弟子屈

川上郡弟子屈町 アイヌ語の「テシ・カカ」(岩磐の上)

①とまむ ②びばかるうし ③やそすけ ④おうむ ⑤にいかっぶ ⑥ちろっと
⑦おしよっぶ ⑧おしやまっぼ ⑨そんてき ⑩ちっばまない ⑪にこまない
⑫しべちゃ ⑬てしかが

「私の住職日記」 第3回

「山で祈る」

苫小牧妙見寺住職 末澤隆信

北海道中央部、青く美しい水を湛える支笏湖。その湖畔に聳える風不死岳の北側を大きく削っているのが「大沢」である。八月下旬、檀家のご主人と一緒にその沢を登り始めた。静かに雨が降って森の匂いが濃い。

三十八年前、このコースをグループで登山中、一人の女性が中腹にある崖から滑落し亡くなる事故があった。以来そのご主人は毎年その日には風不死岳に向かい、奥様が息を引き取られたその場所を訪れていた。

三十年以上、御自宅の御位牌を拝んできた私。ここ数年は、山登りを始めた話をご主人とするようになった。ある日のお参りの後、「住職、今年の妻の命日、あの場所に行ってもいいですよ」という有難いお言葉を頂いた。慰霊の登山が決まった。

鬱蒼とした笹藪を漕ぎ、崩れ易い岩場を乗り越え、やがて現れる沢水の流れに沿って進む。「ああ、ここです」ご主人が指さした。

滝のすぐそばだった。切り立った崖が両側に迫る。見上げれば十メートルはあるだろう。そこから人が落ちたのだ。息を呑み、脚がすくんだ。崖の下に花を供え、小さな塔婆と線香を立てた。僧衣を身に付け岩場に正座する。読経しながら感覚は澄んでいった。聞こえるのは、轟轟と勢いよく落ちる滝の音。三十八年前、薄れゆく意識の中で、その人の耳にもこの音は聞こえていたのだろうか。正座した脚に突いた石が食い込む。岩場で座るってこんなに痛いのか。いや、それならば。この方の感じた痛みや苦しみの大きさは一体どれほどのものだったろう。その場に立つからこそ分かる事実の重み、感じ取る悲しみがあつた。

山の中で唱えたお題目。奥様を想う大切なこの日に、一番悲しみに近いこの場所に、私がいることを受け入れて下さったご主人の想いを心から尊く思った。

僧侶になって三十年、住職になって二十年目を数える。相変わらず未熟な自分。それでも少しずつ本当に少しずつ檀家の皆さんの心に近づけていることを感謝する日々。合掌。



山の塔婆

「法華宗信報」154号

お詫びと訂正につきまして

前号154号の「法華宗北海道開教の寺「久遠寺」(6頁)の文中におきまして、上段後ろより5行目「高松藩城主の長子松平右近頼該公」と表記致しましたが、正しくは「高松藩城主の長子松平左近頼該公」の間違ひであります。

松平左近頼該公(金岳公子)にゆかりのある方々にご迷惑をおかけしました事、誠に申し訳ございませんでした。訂正し深くお詫び申し上げます。以後紙面作りには細心の注意を払い制作して参ります。重ねてお詫び申し上げます。

編集長 千葉啓佑

編集後記

明けましておめでとうございませう。本年も法華宗信報をよろしくお願いたします。

昨年八月お盆号より担当させていただきました、早いもので三号目となりました。まだまだ未熟な編集部ですが、少しでも北海道の良いところが引き出せるよう、引き続き頑張つて参ります。

本年、平成30年は北海道と命名されて一五〇年の節目の年となります。歴史は浅いかも知れませんが、その中身の濃厚たるや一五〇年を感じさせないものであると思ひます。

信報に携わり、北海道の歴史だけでなく、様々な事を勉強させていただいております。本年もその想いを一層深く持ち、皆様にお伝えできたらくと考えておりますので、何卒よろしくお願いたします。

法華宗信報

NO.155

平成30年1月1日発行 発行人/二瓶海照 編集人/千葉啓佑

編集部/〒078-0349 北海道上川郡比布町寿町1-2-8 本宣寺内

発行所/〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院

印刷所/富士プリント株式会社

TEL.0166-85-2657

TEL.03-5614-3055